
銀狐の森

まひつく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀狐の森

【Nコード】

N4146P

【作者名】

まひつく

【あらすじ】

20XX年。宇宙の彼方から銀河連邦所属の宇宙人やら異星人やらが『観光』と称して未開発特別監視下指定惑星『地球』に大挙してやってくる時代。

こんな辺境惑星のさらに一国家のなにが楽しいんだか、対宇宙人用の観光地として不況を乗り越えた日本国、その関東地方の端っこにぶら下がっているとある市では、美貌のあやかし銀狐の血をひく、かつてその地を治めた殿さまとその家来の子孫たちが暮らしている。旧市街と新市街の対立が大人達の中で深まっているその市では、

——あやかし銀狐を慕い、ひとならざるものたちが集い、そして、恋をしている。

壺

市立守矢第二中学校に通う生徒たちは、一日に一度は必ず四ノ宮慧士という名を耳にする。

彼を知っているかという問いに、ああもちろんだと頷く者もいれば、時折稀に聞いた事がないと首を傾げる者もいるが、そこに『とびきり見目のいい黒髪の子』と条件を付ければ、あああれかと納得を示す。白い杖を持った、と駄目押しをすれば、もう誰も否定はない。

その血族を辿れば、守矢市一帯を治めていた殿様に辿りつく。

世が世ならというやんごとなき出生も関係するのか、それとも行き過ぎた美貌ゆえか、四ノ宮慧士を嘲る者は昔から守矢に住む人間には一人として居ない。

これで少しでも、鼻もちならない高慢ちきな少年だったら嫌みの一つでも住民たちは喜んで言うというのに、四ノ宮慧士という人物は、時に清廉潔白の代名詞として語られる。

その黒曜石の瞳が一筋の光たりとも望めぬ事を除けば、非の打ちどころがない。完璧な美貌と頭脳を持ち併せる、一部からは「天使」や「菩薩」と形容される少年だった。

名は体を現すというが、「慧眼之士」が名前の由来だという彼は、正真正銘の「いい子」と評判だった。

いつもにこにこ微笑みを絶やさず、自分よりも他者を優先する。四ノ宮家は明君を何代も輩出してきた家系でもあるので、未だ市民からの人気は高い。「うちの殿様はね、」と親しみと尊敬を持って接するため、時期四ノ宮家当主に対する風当たりは温風にぬるま湯、甘味と砂糖を混ぜた如く甘ったるい。

「そりゃあ、威張り散らして、ムカツク奴だったらこんなに慕わないわ。でも慧士君だったら許すわよ。あの笑顔でにつこり笑われたら誰だっていちころよ」とは、クラスメイトの女子の評である。

最終的には顔かと高橋大和は思ったが、命が惜しいので口には出さなかった。女子のこの学校における地位の高さとそのえげつなさは、時に命の危機さえ覚えるほどだからだ。下手なことは口に出せるはずがない。

そう思っている大和と件の慧士との付き合いは、辿れば数百年前にも遡る途方もないところから始まっている。

四ノ宮家の筆頭家老を務めていたのが、大和の先祖だった。

四民平等、文明開化の折に、多くの家臣たちが四ノ宮家を離れた中、絶対に離れやしないと駄々をこねたのが高橋家であり、仕方ないなと高橋家が残ることを許したのが四ノ宮家だった。先々代の四ノ宮の当主と高橋の娘が結婚したため、今では縁戚関係にある。

生まれた病院も一緒であれば、生まれた月も一緒。徒歩五分圏内にお互いの家があり、互いの両親の仲も至って良好となれば、二人が兄弟同然に育ったのは当然とも言えた。

別に家のことがあったからという訳ではけしてないが、大和は幼き頃から慧士を守ってきた自覚がある。

過ぎたる美貌は毒だ、と大和がしみじみ痛感したのは、慧士が「かわいい男の子が大好きな変な人」に連れ去られて五回目の時だった。

光映らぬ暗闇で、手足も縛られ体の自由さえ奪われた慧士は、しかし警察に保護されるまで泣き喚くこともせず笑っていた。何故だと問うた大和に、だってと慧士は続けた。

大和が助けてくれるでしょう。

一片の疑いもない口調だった。そこにあったのは、純粹無垢な迷い無い信頼と、曇りない大和に向けられる、笑顔。

傍に控えていた警察官が言うには、慧士はずっとこの調子で、焦

りも喚きもせず誘拐犯に従っていたという。

何か、実践で使える、体術、教えてほしい。神妙な表情で、父親にそう大和が懇願したのはその夜のことだ。

かつての高橋家と四ノ宮家が主従であるという事実は確かなものだが、それをこの現代にまで引きずるものは、一族内でも少ない。大和の父親は、四ノ宮の前当主の年は近かったが、あくまで親戚同士という立場を崩さなかった。思いつめた表情の長子に、まさかそのような申し出を受けるとは思ってもいなかった父親は、あくまで慧士が攫われたのは大和のせいではないと説明したのち、そこまでお前が四ノ宮家に尽くすいわれは無いのだよと窘めた。

けれど、大和の決意は揺るがなかった。

父親の言葉にしっかりと首を振り、教えてほしいとこうべを垂れた。

四ノ宮の若様だから「若様」。その従者だから「筆頭」。

誰が言い出したのか。冗談交じりで誰かが口にしたあだ名は、瞬間に校内中に広まり、通称名にまでになってしまった。

それをどうかしようとは大和は思わなかったが、慧士はほんの少し困ったように笑みを浮かべて、恥ずかしいねと俯いた。

「別に恥ずかしがる事無いだろう。実際世が世ならそうになっていたかもしれないんだから」

「それはそうだけど。盲目のお殿様なんて聞いたことがないよ。きつと能力不適合を押されて、徳川さんに潰されていたかもしれないよ」

「双子が黙ってないだろ」

慧士には双子の妹がいる。

兄と同じく四字熟語を縮めた名の由来を持ち、姉を「百花繚乱」の百花、妹を「採薇之歌」の採花という。名は体を現すのか、こちらにも大層な美少女であるのだが、盲目的な慧士信者でもあり、兄を傷つける者あれば、国家権力であろうが地球外生命であろうが、た

たつ切るといふ些か偏った思考の持ち主だった。

大和にも二人の弟が居るが、末弟の尊が双子と同年にあたり、尊が泣きそうに愚痴をこぼす度、兄二人は同情を禁じ得ない。

その採花から、兄がおかしいと連絡を受けたのは昨夜のことだった。

兄の慧士とは仲がいいが、その妹たちとはそれほど親交は無い。異性ということもあるが、もともと大和は四ノ宮家と一線を引いている。いくら親戚関係とはいえ、先々代の繋がりといえども赤の他人レベルだと大和は考えている。

慧士に関しては乗り掛かった船と別格扱いだが、自ら進んで関係を結ぼうなどとはこれっぽっちも思っていない。双子と（強制的に）仲がいいのは、どちらかと言えば弟の尊だ。

見知らぬ番号に眉を顰めながら携帯電話に出ると、控えめなハスキーボイスがこんばんわと囁いた。

「採花か。どうしたこんな夜に」

「尊くんから番号を聞いたの。夜遅くにごめんね、大和くん」

「いや、いい。慧になにかあったのか」

「慧くんが、おかしい」

疑問ではなく、確信の声だった。

ますます眉を顰めた大和に、きつと電話口で途方に暮れているであろう少女は、ごめんねと何度も謝った。

「きつとね、大変なの。明日、がんばって。がんばってね」

何の事だかさっぱり射ていないのだが、どうやら慧士の命に関わることはないのなら、と大和は電話を切った。

次の日、大和はその意味を正しく理解した。

薔薇色に色づいた頬。しみ一つない乳白色の肌は匂い立つように瑞々しく、長い睫毛に縁取られた黒玉は膜を張ったかのように濡れている。

銀河を凝縮した濡れ羽色の髪。愛らしく桜色に色づく唇。悩ましげに寄せられた細い眉に、そっとつづため息。

「大和、どうしよう。好きな人が、出来たんだ」
幼馴染の若様は、筆頭が知らぬ間に、恋に落ちていた。

式

「若様が恋に落ちたつてのは本当かい？ 筆頭」

「悪夢だ」

真っ青な顔をして呟いた大和に、クラスメイトである杉山信哉は笑い声をあげた。

四ノ宮主従は、学校ではクラスが違う。慧士が一组、大和は三組だ。いつものように一组に慧士を送り届けると、大和は振り返ることなく猛然と三組に駆け込んだ。何かと目を丸くする生徒たちをしり目に、自分の席に着くと、大和はやっと溜まりに溜まったため息をついた。

大和の席は窓側の一番後ろ。絶好の居眠りポジションに陣取った筆頭の前が信哉の席だ。先に登校していた信哉は、くると振り返り、青い顔をした少年に目を見張ると、面白そうに観察を始めた。

信哉はこの主従と幼稚園からの付き合いなので、中学校から親しくなったという生徒たちよりはずっと仲がいい。腐れ縁という結びつきも感じ始めている。その腐れ縁がこののち、高校、大学と続くことをこの時の二人はまだ知らない。

あの慧士の美貌を前にして、驚くほど普段と変わらない態度をとるという点では、杉山信哉という少年は、稀な存在と言えた。

それほどまでに、四ノ宮慧士という存在は、大きい。

皆の若様が恋に落ちたという一報は、瞬く間に学内を駆け巡った。若様同様、兄を盲目的に敬愛する妹の双子の存在も、この中学校では有名人である。いつか恋人は出来るだろうが、あの双子が目を光らせている限り、まだまだその日は遠いだろうと思っていた生徒たちは、突如降って湧いて出たこの色恋沙汰に、目を丸くした。あの双子が兄の恋愛を認めた。いったいぜんたい何があったというのか。

大和の形相にげらげらと腹を抱えて笑う信哉に、震えあがるよう

な鋭い視線を浴びさせて黙らせると、大和は頭を抱えて机に突っ伏した。

「あれは、駄目だ。絶対に、駄目だ」

「何が駄目だつて言うんだよ。健全な中学生なら、恋愛の一つや二つ推奨されて然るべきことだろ？」

「あの反応が駄目だつてんだよ！」

慧士の美貌は、時に恐ろしさをも感じさせる。

殿さまという存在が消えて、早幾年。江戸が東京と名前を変え、京におわしました帝が皇居へと移り、時代が幾つも流れ、とうとう銀河の果てから宇宙人までもが「辺境の観光地」と足しげく地球に通うようになってしまったこの現代で、未だ四ノ宮家を殿さまと慕う市民の姿は時に奇異なものと映る。

この守矢市の風潮に目に見えて拒絶感を示したのは、ここ五十年の間に守矢に新しく出来た新興住宅街や団地にやってきた、よその土地から来た住民たちだった。

その人口比率は、もともと城下町として栄えた、田園地帯を中心にした旧市街と、首都圏近郊整備地帯に指定され、都市再生機構により手をいれられ発展した新市街に、はっきりと分かれる。

市内に存在する三つの市立中学校がその勢力図を如実に現しているといっても過言ではない。

旧市街の中心に位置し、この地に代々住まう親四ノ宮の態度をとっている住民が大多数を占める市立守矢第一中学校。

むろんこの学校に通っている生徒たちも親や祖父母の影響で、四ノ宮家兄妹やその筆頭である高橋家兄弟を敬うというスタンスをとる生徒が多い。第二中学校と近いためか、合同で行事ごとを行うことも多く、慧士を実際に目にし、彼を認め崇拜する生徒たちも圧倒的に多いのも特徴だ。市内で最も古い学校ということで、伝統色が

強く、矜持が高い生徒が多いのも有名だ。

旧市街、新市街の中央に位置し、二つの土地から半分ずつ生徒を受け入れる形を取っている、その話題の中心たる主従が通う市立守矢第二中学校。

表立った反発心は起こってはいないが、けして親密ではないという立場を取る新市街出身者が多い。もちろん旧市街出身者は慧士を敬愛するが（これが新市街の親たちには理解できないようだ）、新市街出身者でも、慧士の魅力に取りつかれるものは多い。大和に「いちころよ」と語った女子も、元は新市街出身者だったのだから、その魅力の効果たるや、尋常ではない。両派閥の親が混在しているため、学校内の衝突頻度は飛びぬけて高い。

そして、新市街出身者だけが通う守矢第三中学校。

急激に増えるであろう人口を見越し、区画整備に伴い確保していた学校用地に十年前に建設された新しい学校だ。校舎も一番近代的で、太陽光システムや新素材を積極的に使用するといった、エコを前面に押し出した校舎の作りをしている。第一中学校に通う大和の友人が、「木造校舎が残るこっちはえらい違いだ」と漏らしたのを聞いたことがある。そうした背景も関係しているかどうか大和は知らないが、この第三中学校と第一中学校は、とてつもなく仲が悪い。

やれ偏差値だ、やれ体育祭だと競い合っては、火花を散らす。それを止めるべき立場の教職達も地元出身者が大半を占めるためか、この騒動を一緒になって騒いでいる節があるから手に負えない。

むろん、その根底にあるのは、「四ノ宮家を認めるか否か」というどうしようもないものだ。

守矢市にはもう一つ、前身が四ノ宮家の家臣が勤めて居た江戸時代の私塾、明治時代には女学校と姿を変え、平成の今は幼稚園から大学までの一貫マンモス校となった私立校があるのだが、こちらは守矢市の郊外にあるのも加え、生徒たちが寮生活を営むなど守矢市以外の県から通っている生徒が大半を占めるため、争いごとには傍観を決め込んでいる。

四ノ宮家に政治的発言力は無い。

賄賂を贈り、自分たちの有利になるような政治家を贖身したり、四ノ宮家の一族の子供たちを特別扱いしろと命令したこともない。ただ市民が勝手に彼らの先祖を敬い、その感謝を現在になっても続けているというだけだ。

だがその姿が、信仰や敬意を持つ存在というものに触れずに育ったであろう新市街の人々に、広大な土地を未だ有し、無言の発言力を及ぼす四ノ宮家という姿で映らせてしまい、酷く嫌悪感を示す結果となったしまった。

「四ノ宮家に受けた恩を返しているに他ならない。それをよそ者にああだこうだと非難されるいわれは無い」。これが第一中学校の言い分だ。

「それが可笑しい。いい加減江戸時代の恩をいつまで続ける気だ。まるで一つの宗教じゃないか。気味悪い！」これが第三中学校の言い分だ。

四ノ宮主従の中学進学と共に膨れ上がっていた対立図は、対に二校の抗争という形で爆発した。

子供と侮るなかれ。物心つく前から、実の両親に四ノ宮家の一挙一動を重箱の隅をつつくような批判を聞かされて育てばどうなるか。彼らは『四ノ宮家と守矢市は異常』という先入観が植え付けられ育成された、立派な先兵隊である。

彼らには悪気はない。生まれてこのかた自分の正しいとと思っていることを唯唯諾諾とそれが自分の意見だと勘違いしたまま声高に主

張しているだけであり、それゆえに注意しようにも出来ない悪質な
ものがある。彼らには、その「主張」により伴い生まれる慧士の心
労や苦痛など、考えてもいないのだ。目の前に張本人がいるという
のに、まるで画面越しの番組に意見するように簡単に、慧士を貶め
る言葉を紡ぐのである。

もちろん、慧氏の人となりを知って、自身の考えを改めるものも
いる。それまで自分が信じていた「四ノ宮慧士」と実際の「四ノ宮
慧士」のずれに気付き、がらがらと今まで信じてきたものが崩れさ
る感覚に陥り、それでも慧士を拒絶する先入観に縛られ、出口が無
い迷宮に迷い込む生徒まで現れ始め、それがまた慧士の心痛のもと
となる、いちごっこが展開されてしまっている。

その極端な思考に偏ってしまったお隣さんの中学校の抗争に、ど
つちもどつちだ馬鹿、と大和は頭を抱え、放置の態度を取ったが、
慧士はそうはいかない。何せ話題の中心は他ならない自分である。

もともと自分を追い詰めるたちの慧士は、白い肌を更に青白くし、
桜の花びらのように色づいた形良い唇を噛み千切らんばかりにし、
光映さぬ黒瞳に涙を溜めて呻いた。

「……………僕が死ねば、騒ぎが収まるのかな…」

はらはらとこぼれ始めた涙と、倒れんばかりに心労でやせ細って
しまった若君を見て、まなじりつり上げ激怒したのは大和を含めた
第二中学校の生徒たちだった。

この時ばかりは、旧市街新市街出身者関係なく、怒髪天を突いた
激怒ぶりだった。たとえばどちらの立場を取っていたとしても、身内
の恥をせつせと量産しているとしたか思えない両校に、さすがの彼ら
も堪忍袋の緒が切れたともいえるかもしれない。

何より、若様だとかという以前に、十四にも満たない少年をよつ
てたかつて自殺思想にまで追い込むことが大人のすることかと、生
徒たちは怒り狂った。

第二中学校の生徒たちには、子供たちの抗争を隠れ蓑にその両親

たちが好き勝手に動いているのがよく見えたからだ。

中学生が想像しうる様々な武器を持って第一中学校と第三中学校に乗りこんだ生徒たちは、この不毛な争いを止めなければ校舎を壊すと脅したのだ。

実行する気は生徒たちには無かった。器物破損などという犯罪を起こせば、かの優しい若君は更に心労に襲われるだろう。けれどこのままこの二校の争いが続けば、若君が思いつめて世を儚んでしまいかもしれない。紫式部が筆折いた最後の段の姫君のように、慧士は消えて居なくなってしまうかもしれない。このまま慧士が入水自殺しても知らないぞと主張した第二中学校は、この二校と、対立していた旧市街と新市街の大人たちに向かい啖呵を切った。

後は野となれ山となれ。授業をボイコットしてでも戦ってやると息巻いていた生徒たちを宥めたのは、以外にも傍観を決め込んでいた私立校の教職員と生徒代表たちだった。

その土地の生徒たちが持ち上がり入学する公立校と違い、私立校は受験を突破した生徒たちから授業料を受け取り、守り育てる義務がある。特にこの私立校には、寮生として、幼いながら親元を離れ、健気にも勉学に勤しむ子供たちも少なくはない。

その彼らを取り巻く環境が、情操教育上大変よろしくないものだと苦言を呈した私立校側は、強引にも調停役となり、争いの無期限停止の調停にまでこぎつけてしまった。

それが、約一年前の事。慧士たちが中学二年に上がった頃の話である。

出身地の場所とは関係なく、手を取り合い殴りこみに行った生徒たちに感動したのか、若君は一人一人の手を取り、今度はうれし涙をぽろぽろと流した。

「ありがとう」

特に、本人を直接目にする機会がなかった私立校側の関係者は衝撃が走ったようで、その美貌に、ひたすら唸るしかなかったという。

私立校の前身の私塾は、四ノ宮の殿様が部下に指揮したものがはじまりだというから、感慨もひとしおなのかもしれない。

この時から今まで、表立って対立がおこることは無い。さすがに空気を讀んだのか、中学校入学当時に起こった第二中学校の保護者による言いがかりに近い慧士への糾弾も、すっかりなりを顰めてしまった。

襲撃事件に参加した生徒たちが、親に「四ノ宮慧士はいい奴だ」と進言したことも大きかった。お礼を言った慧士の笑顔は、殴りこみの謝礼としては、お釣りがくるほど麗しいものだったからだ。

そして同時に、子供たちを利用して四ノ宮慧士と四ノ宮家を陥れようとした保護者たちの姿は、少なからず思春期に入った子供たちに不信感と疑惑を植え付けたためだった。

その話を聞き、逆に新市街の保護者たちは余計に慧士に警戒心を抱くようになった。

子供たちを惑わすあの美貌は、きっとあやかしか人外のものに違いないと。

「巡り巡ってしつpegがえしがきただけなのに、どうしてそこまでして無理やり正当化しようとするかな、あの人たちは」

「便利な変換装置でも脳内に植え付けられてるんだろ。もしくは本人どもの言語機能中枢が宇宙人化してるかのどっちかだ」

「おお、俺たちも三十年で立派な銀河連邦所属の「宇宙人」になれたんだな。で、あいつらが使用している言語はこの惑星間で使用されているものなんだ？」

「太陽系第三惑星の地球」

「救いようがないな」

その話を子供たちは笑って受け流したが、旧市街の住民は何と云えない曖昧な笑みでこの噂を聞き流した。実のところ、あながち、外れでも無い。

そう。

人外と新市街の人々は四ノ宮家の美貌を評したが、間違っていない。

四ノ宮家が土地を治めるに至った経緯は、実のところよく分かっていない。古い文献をひも解けば、どうやら平安時代に四ノ宮という文字が天津神の神宮建立の際に確認できるが、それがどういった経緯を辿り君主に採りたてられたのか、いまいち伝わってきていない。なので、四ノ宮家が君主となった有力な説として信じられているのは、この地方に伝わる伝説が大半を占めていた。

守矢の銀狐退治がそれである。

大江山の酒吞童子然り、玉藻御前の退治然り、古今東西に伝わるあやかしの退治ものよろしく、この関東の端っこにしがみ付いている土地である守矢にも、ある物語が伝わっている。

そのあやかしは、その姿を描こうとした絵師が筆を折り、自身の力量不足を嘆くような「絵にも描けぬ」美貌を持つ、ここら一帯のあやかしを率いて悪さばかりを繰り返す、残虐非道な九尾の狐だったと伝えられている。

月下を思わず、ハツとするような銀色の毛並みから、人々はそのあやかしを銀狐と呼んだ。悪さばかりをする銀狐にたまりかねた住人は、近くの神社の神主に相談した。どうすればあの狐を懲らしめることが出来るだろうか。神主は笑って言ったという。

——村はずれに住む四ノ宮さんに息子さんに任せてご覧。きつと何とかなるはずだ。

あまりの唐突な四ノ宮の登場に、この昔話を聞く子どもたちはみな首を傾げる。大和もそうだった。あまりの唐突さは、どう考えても四ノ宮の施政の正当性を主張しているようで、どうも嘘臭い。

だがその後の展開で、この物語が事実ではないかと思に至る。

四ノ宮の息子は、その銀狐が化けたものとは知らず、とある娘と恋に落ち、夫婦となったというのだ。

初めはほんの戯れのつもりで夫婦となった銀狐は、四ノ宮の息子と出会い日々を過ごすことで、人間を知り、愛に苦しむようになる。そして己が繰り返していた所業のおぞましさに気付き、苦しみぬいた挙句命を絶ってしまったという。

息子の嘆きようは、近隣の村々にまで響き渡るものであった。三日三晩泣き暮らし、そのまま後を追うようにして息子も死んでしまった。当時では珍しい大恋愛の末の結婚だったというのだから、二人にあったのは嘘偽りの無い真実の愛だけだった。

人々が四ノ宮を慕う理由は、この夫婦への自責の念も混じっているからではないかと主張する人間もいるが、真相は分からない。

銀狐は一人の子供を残していた。

それが慧土の先祖である四ノ宮の殿様だという。あやかしの血を受け継いだ四ノ宮家は、人ならざる者たちの力を借り徳川に尽くし、その偉業が認められ、小さいながらも己が一族が育った土地を預かったのだという。あくまで伝聞である。なぜなら、徳川に四ノ宮などという家臣は居ないからだ。

江戸時代に、突如文献に登場し、さも当然のように四ノ宮家は守矢を治めた。そして徳川もこれを認めたのである。訳がわからないが、揺らぐことのない事実だった。

この謎に満ちた徳川家と四ノ宮家の関わりを調べようと、時折守矢には学者が訪れることもある。最終的に皆お手上げ状態で帰って行き、学術的に守矢を奇異な目で見ていくのだが、住民たちにも関係がさっぱり分からないので、そんな風に見られても困るというものだ。

出自は不明だが、四ノ宮家は代々驕り高ぶることもなく、勧善懲悪の施政を敷き、飢饉と天変地異に襲われた時代も揺らぐことはない、立派な城主を勤め上げ、守矢は四ノ宮の力を借り、栄華を極め

たという。

いくら古来より災害が少なく、豊饒な土地も手伝い「作れば何でも取れる土地」として稲作と畑作の農業が盛んであったとはいえ、それらの土地を更に開墾させ、国ひとつ傾かせること無く、家臣の意見も取り入れ、近辺では珍しい私塾や女子の学び舎も作ったというのだから、この殿様がいかに民草を思っていたかと偲ばれる。

その学び舎は姿を変え、今も私立学校として守矢郊外の土地に建っている。だからこそ、市民の四ノ宮に対する愛着は深い。

そして、銀狐を慕っていたあやかしたちも、姿かたちを変え、頭の一粒種を救い、守ったという。その為、守矢市のあちこちには、あやかし関連の逸話が掃いて捨てるほど残っている。

元はここら一帯を示して言われていた「森のような夜」を縮め「森夜」と呼ばれていた名称をわざわざ「守矢」と改めたのも、四ノ宮の殿様に射られた弓矢を、その身を呈して守った一匹のあやかしに畏敬を評したためである。矢から守りしあやかしが居る土地として、守矢市に住む旧市街の住民はこの市名に誇りを持っている。

そういった土地柄と狐の血が入ったと言われるためか、何代も代替わりを繰り返しているにもかかわらず、四ノ宮家はぞつとするような美貌を持った人物が生まれやすかった。先祖がえりでも何でもなく、生まれてくる子供が皆、美しい造りをしている。

今でも語り草になるのは、慧士の亡き母君である先代の四ノ宮当主の美貌だった。

先代に仕えた高橋家の筆頭は大和の父親だが、彼は酒に酔うといつも決まって慧士の母親の事を話し始める。それは、大和にとってあまりにも荒唐無稽な話だった。

彼女が願えば、叶わぬことは一つもなかったという。

「一言。笑ってくださいとねえさんが言えば、みなが笑った。抗いがたい衝動が全身を駆け巡って、否定することなんて出来なくなるぐらいの魅力が、ねえさんにはあった」

二つ年上の前当主を姉と慕った父親は、ぼけた？と心配する長男

の額を小突き、困ったように笑った。

その笑みの理由が、やっと大和には分かった。

なるほどこれは、抗いがたい美貌というのも理解できる。言い伝えの四ノ宮の息子が、自分の命を絶ってしまうほど悲しんだ理由が分かる。

恋をしたと断言した慧士の美貌は、燦然たる輝く太陽の如く、雲間に隠れる月光の輝きの如く、今や燦々と煌めきを増していた。

付き合いの長い大和でさえ、言葉を失ってしまうほどに。

現在の守矢市の人口は、旧市街をはじめとする、先祖伝来守矢に住んでいるという「親四ノ宮派」の住人の方が多い。だが、急ピッチで行われている都内につながる沿線開発に端を発した守矢市新都市計画により、高層マンションや新市街などが、様々な場所に乱立し始めている。駅前地区のマンションに今後住むであろうほとんどの住人が、もしかしたら四ノ宮家の存在を忘れているかもしれない。今はまだいい。住民は旧市街出身者が多い。だが遠くない未来、この市はほとんどが他県から来た住人に占められるかもしれない。

その場合、四ノ宮家に対する恩など、忘れて然るべしという風潮が流れることが必至であろう。大和はそれを懸念している。忘れてくれるのは構わない、だがもしも風化を断罪と取り違える馬鹿が出てくれば、それは慧士を追い詰めてしまうことに他ならない。

四ノ宮の権力を、つけ狙う輩まで出てきてしまうかもしれない。

——だから、四ノ宮も高橋も、敬えとか命令したことは無いんだって。

——なのに勝手に勘違いした揚句、四ノ宮のかつての栄光に縋った子孫が、守矢を言いように支配していると——そっちの方が誇大妄想展開しているじゃねえか。サスペンスも二時間ドラマも馬鹿な設定乱立させすぎだっての。旧家も名家も口出ししないって政治舐めるな。

——だから、慧士も双子も、思春期突入しているのに、惚れ

たはれたの一言も言いだせなかったんだよ……………！

慧士と双子は、自らの立場を心底理解している。一挙一動が人々の視線にさらされ、下手に恋人を作ろうものなら、旧市街からはあれは駄目これは駄目と難癖をつけられ、新市街からはそんな女が四ノ宮の彼女とはお家が知れると重箱の隅を突いたような論いをされ馬鹿にされるのが目に見えている。だから四ノ宮家の兄妹は、恋人が居ても可笑しくは無い年齢になっても、浮いた話題一つ流れたことが無かった。

下手に恋人を作れば、相手を傷つける結果につながってしまうかもしれないからだ。

何よりも足を引つ張って居たのは、兄妹の美貌だった。少なくとも、この守矢市に置いて（旧新関係無く）慧士の彼女に名乗り出ようという猛者は居ない。その顔と心根の横で彼女などしたくないと皆が首を振る。そんな兄を見ながら育った双子は、並大抵の美貌と精神を持った男子で無ければ彼氏にしくは無いと駄々をこねる。

「お釈迦さまか、聖人か、どっちかが守矢市に流れ着いてくれればいいんだけどね。ほら、そうすれば万事解決じゃない？」

高橋家の末弟はあっけらかんと無理難題を口にしたが、もしかしたらその二者でも双子は首を振らないかもしれない。精神はともかく、顔が及第点に及ぶか分からない。まったくもってわがままな双子だ。

そんな妹たちを放っておいて彼女など作れないと慧士は言い、ここに出口の見えない堂々巡りが完成である。

兄妹たちの母親、先代の四ノ宮当主は、守矢の手が届かない、遠く離れた大学の学び舎で夫となる人を見つけたという。

もしかしたらそうなるかもしれないと、すでに慧士は達観しているし、大和にも「先に彼女でもなんでも作ってもいいんだよ？」といらぬ忠義を尽くす幼馴染の心配までしている。

余計な御世話だと大和は嘆息していた。

それが、急展開を迎えている。

「信哉、お前、慧士の事見たか？」

「見たよー」

「どう思った」

「どう思っつて…。いや、見事なものだなんて思っただけど」

信哉は失笑を浮かべる。

「あれ、大変なことになるぞーとも思っただ」

その言葉に絶望に彩られたため息を吐き、更に青く染まった表情で大和は悪態をついた。

「あれさー。どうかと思うよ。今頃一組の奴らで耐久レース開催しているんじゃないかなあ。若君自覚ない分あの美貌のままにっこにこするだろうし、無駄に綺羅綺羅しいオーラ振りまきまくって、いたいけな少年少女の事を道ならぬ色恋沙汰に引き摺り込むんじゃない？」

「また保護者達が学校に乗りこんでくるか…」

「というより、勘違いした頭がぱっぱーな男の人と女の人が市内に増えるかもね。昔みたいに、裸にコートだけ着た変質者とか、やたら鼻息荒い中年の女性とか。そういえばさっき一年が列なして殿のところに走って行ったよ。たぶん、明日になれば学校中話題独占だね」

悪夢だ、と大和がつぶやいた。

前当主の面影を受け継いだ子供たちが、揃いも揃って見目麗しい外見をしていることは市内に住んでいる人間なら誰でも知っている。

特に慧士の容姿は、少年でありながら、双子たちの年齢がまだ咲き誇るには遠い蕾の年代であることを差し引いても、当代一と讃えるに相応しい容貌をしていた。兄妹の中で一番色濃く母親の血を受け継いだのであろう。

自覚があればいい。だが慧士は自覚がないうえに、目の光を奪われてこの世に産まれてしまった。故に彼は恐ろしいほど無防備に、

自分の容姿がどう働くかという事実には、未だ気づく様子はない。どちらかといえば、容貌が美しいと讃えられても、「四ノ宮家の次期当主だから、少し大げさに言っているのだろう」としか受け入れていないような気もする。

だからこそ、この筆頭が今まで背負ってきたという心労は、計り知れないものがある。

信哉は頭を抱えた筆頭の肩を叩くと、頑張れと無言で声援を送った。

信哉はこの主従をよく知っている。授業中だというのに教室に乱入し慧士を攫おうとしたり、体育の時間あらゆるものを盗まれたり、登下校の電柱柱一本ごとに隠れた変質者の列を、口八丁手八丁で抑えつけてきたのは、この大和だった。

そしてその大和を深く信頼し、愛したのも慧士だった。

恐らく大和は慧士を祝福したいに違いない。大和にとって慧士は使えるべき主君という前に、たった一人の掛け替えの無い幼馴染だ。親友だ。光を知らないというハンデも、意味不明な大人たちの争いの中心に担ぎあげられても、いつだって自分を殺し、誰かを思い、慈しんだ慧士を、大和は誇りに思い無二の親友とも思っている。だから、慧士が普通の少年のように頬を染め、恋に落ちたと真っ先に自分に告白したことは、大和にとって喜ばしいことだった。

喜ばしいことなのだ。

あの異常な美貌の、花咲いた花々の下に眠っていた、押さえつけられていた真の蕾の花咲き具合にさえ目を瞑れば。

「騒ぎにならなきゃいいんだけどねえ。うちはともかく、他の学校が騒ぎだしたら面倒だよ。相手は誰だ、どいつが若君の心を奪ったんだって、ゴキブリみたいに這いつくばって探す姿が目には浮かぶ。

最近じゃあ、一年前の殴りこみが原因で、我関せずだったはずの私立の連中までこっちの事情を面白がっている。生徒会とか運営委員会とかはさすがに下手なことはいないだろうけど、話題には上がってはいらんじゃないかなあ」

そしてまた優しい若君は、一人心を痛めるのだ。

「……………それだけは、避けたい」

出来るだけに穏便に親友の恋を祝福したい二人は、これから起こるであろう騒ぎに揃ってため息をついた。

「出来るだけ穏便についていう考えが浅いんだよ、最近の学生どもは。怒りは一時の狂気って言うけど、その通りだね。救いはうちの市内に高校が一つしかないことだ。これで素行の悪いおねーさんやおにーさんまでも校門にでも群がり始めたら、さすがの俺達でも対処しきれないよ」

「——ひけはとらないつもりだが」

「もちろん、我らの大和や誇るべき我が体育慧部活動の皆さんをが負けるとは思っていないさ。でもね、大和。暴力沙汰を起こしたら、それこそPTAに付け入るすきをほいほいやっていることになるんだよ。僕らは受験生だ」

内申点に響く、推薦入試に悪影響を与えたらどうするつもりだと、愛玩犬のようにきゃんきゃんと喚き散らす母親たちの姿が目には浮かぶ。

遠まわしに、きつかけを作っているのはあなた方自身だろうと意見しても、「子供が親にたてつくとは一体どんな親に育てられれば非常識な子供が産まれるのか」とさらに訳の分からないことでひっかきまわすに違いない。

「だったら大人しく傍観していればいいだろうに…」

「残念ながら、彼らにとつて子供は『一つの自立した人間』ではなくて、自分たちが真綿に包みこんで保護し続けなければならない『可愛い可愛いお人形』なんだよ。自分の持ち物が傷つけられて、黙っていることなんて、あの人たちに出来るはずがないだろう?」

「そんな子供、碌な子供にならんぞ」

「残念、新興住宅地の皆さま方は、都内からこちらに越してこられたエリート層の方々ばかりだ。金持ち集団は、子供が疑問を持つ前に塾に放り込むにきまっている」

二人の会話を遠巻きにして聞いていた生徒たちから、さもそうだと言わんばかりに失笑が漏れる。

教室には二人の他に、クラス全員とは言えないが約半分程度の生徒たちがたむろし、授業開始までのおの自由行動をしている。

早々と席に陣取り読書をするものや、教室の床に座り込み話し込む生徒の集団、黒板に落書きするものもいた。二人が話し込む窓際の一番後ろは、日が当たるうたた寝には絶好の場所で、生徒たちが陣取る馴染みの場所でもある。朝練習が終わった生徒たちも涼を求めて窓際へと寄って行くので、けして声を顰めず行われていた会話は、そこら一帯で過ごしていた大多数の生徒たちには筒抜けだった。教室に入ってきた時の大和の形相に息をのんで成り行きを見守っていた彼らは、辛辣ともとれる二人の応酬に、やっと笑みをこぼした。

「——ちよつと、信哉。あんたも守矢に越してきた口でしょ？そんなに簡単に悪口なんて言っているの？」

「良いんだよ、青木。俺が引越してきたの、俺の生まれる前よ？親はともかく、俺は生粋の守矢っ子だっつの」

「なにその守矢っ子。言い方だっさ。かつこいいと思ってるわけ、馬鹿みたい」

「筆頭、大丈夫？信哉と一緒にいたら、馬鹿になっちゃうよ」

「平気だ。馬鹿にならないうちに手は切る」

「……あー、ねえちよつと、本人を前にして辛辣すぎないその会話」
三組は、新市街出身者が多い。

その割に、大半が「親四ノ宮派」という、一種独特なクラスだ。さすがに親の手前、大手を振って「自分は慧士が好きだ！」と主張することが出来ない生徒もいるが、その場合は無言や匿名で、かいがいしく慧士の学校生活を支援している。

これは実は、大和と信哉による功績が大きい。

この二人はもともと「旧市街」「新市街」で人を差別するようなことは一切しないし、言ってしまうえば「四ノ宮慧士」であってすら

人と区別するようなことはけしてしない。あくまでその人となりを見る。

その為、新市街者が多い教室にも簡単に慧士を招くし、話題にも出す。慧士も、然り、裏表なく人々に接する。

「こんにちは。大和と信哉は居る？教室に入ってもいい？」

慧士がそう言いながら三組に遊びに来るたび、慧士に対する目線の厳しさは減って行った。

繁雑に荷物が置かれた教室を、器用に歩く盲目の少年を、初めはおっかなびつくり、そのうち心配するように、そして、彼が歩む時に邪魔にならないように、いつの間にか荷物が整理されるようになった。

どれも、慧士や大和がやって欲しいと願ったわけではない。勝手にクラスメイト達が自発的に行って行った。

がやがやと騒ぎ始めた一同に目を向けつつ、中にはやはり浮かない表情を崩さないものもある。

「うん。でもうちの親も新市街で、若にも私たちにもそんな感じ崩さないしなあ。若の恋路に関してはあんまり強く言えないかも…」

そのうちの一人、まっすぐの黒髪を背中に流している女子が申し訳なさそうに大和を見た。

大和は首を振り、心配そうな面持ちに安心させるように笑いかけた。

「別に川崎が気にすることじゃない。勝手に騒ぎ立てる親たちが悪いんだ。ただ俺たちは…出来るなら穏便にこのことを進めたいだけだ」

すると呆れたような声が、黒板の前でたむろしている一団から飛んでくる。どうやら教室中にこの会話が響いていたらしい。四方八方から興味津津の視線が、大和たちに向けられている。

「進むかどうかの瀬戸際に、開始一分で追い込まれているから悩んでるんじゃない」

「どうすんだよ、筆頭！」

「違いないと信哉が笑った。

「どーにもこうにも、話をしっちゃかめっちゃかにしたがる輩は沢山いるからねえ。このまま時に任せて様子見と決め込もうじゃないかなんて悠長なこと言えそうにないよ」

「俺も——さつき若君にあつたけど。ありゃあ、酷いね」

「何が酷いとは言わない。

教室にはまだ今現在の慧士の姿を見ていないものもいるようで、その発言にしきりに首を傾げている。

「何が酷いわけ。俺も見てこようかな？」

「やめとけ。道外れるぞ」

「おれ、外れそうだ」

「カミングアウトすんなよ今の段階で……」

「いや……覚悟決めようかと」

「決めるなよ！」

などと会話がそかしこで行われている。

「もちろん。人の恋路を邪魔する奴は、馬に蹴られてしんじまえていうけど。少しねえ……度が過ぎているんだもの、あれは。若様の好きな人って、高橋くん、知っているの？」

「いや、そこまで突っ込んだ話はしてない」

「というか、びっくりしすぎて出来なかったのかな。だったら放課後詳しく、慧ちゃんに聞きに行こうか」

「放課後？ 今じゃなく？」

同級生の問いに、信哉が窺うようにして教室の前方の入り口を見た。扉に嵌められたすりガラスを眺め、更にその向こう側を覗きこんでいるように両目を眇める。

「だって、今日一日は、たぶん一組に近づけないと思うから」

意味が分からず首を傾げる一団の中、一人大和だけが忌々しそうにため息をついた。

説明しようとさらに信哉が続けようとした時、スピーカーからチャイム音が響いた。授業開始五分前の予鈴だ。廊下からは朝練習を

終えた部活組と、寝坊のための遅刻組の、教室へ駆け込むための忙しなく走る上履きの音が響いている。

生徒たちも弾かれたようにそれぞれの席へと戻って行く。肩をすくめ、信哉が前へと向き直り、大和も机の中から一時間目の教科書とノートを取り出した。

その時がらりと後方の扉を開け、せき込みながら教室に走り込んできた遅刻ギリギリの生徒が、信哉の言いたかったことを、偶然にもクラス中に響く声で引き継いでくれた。

「——なあ、一組なんかあったの？ 一年二年が教室取り巻いているわ、敏腕委員長が怒髪天付いているわ、なんだかしらねえけど、やけに臨界体制状態で、嚴重警備にも程があんだけど。みんなぴりぴりしてるしさー、つーか、若に挨拶しようとしたらやたら目え付けられたし。お前か！ とか叫ばれていきなり襲われたし。もー意味分かんねえ。超わかんねえ。なに、ほんとになんかあったわけ？」

よほど据えかねたのか、理不尽な暴力だと叫ぶクラスメイトを見て、なるほど、これは確かに放課後にならなければ近づけないと、クラス中の生徒が心の中で思った。

「慧ちゃん、おめつとさん。好きな人出来たんだってー？」

「……信哉？」

放課後の教室。

大和にひつつき慧士を迎えに一組へと入った信哉は、帰り支度をしている友人に努めて明るく声をかけた。

距離も縮めず、教室の後ろのドアから入った途端叫んだので、教室に残っていた生徒たちは声の発生源である二人に視線を向けることとなった。

そのうちの一人が大和だと分かったと、目に見えて安堵の表情を浮かべるものが多い。ああと向けられた乾いた笑みは、今日一日の彼らの悲劇を二人が悟るには、十分なものと言えた。

信哉の登場は思ってもいなかったことなのか、ぱちりと瞳を瞬かせると、慧士は首を傾げる。そしてその内容に祝福が混じっていることに気付くと、一面に桜の花が咲いたかのような満面の笑顔を浮かべた。

「ありがとう」

「……うん。幸せそうで何よりだね。ねえ、大和」

その笑顔の迫力に気圧された信哉は、自分の横で顔を覆ってしまった筆頭に声をかけた。

「大和？ 迎えに来てくれたの？」

更にぱつと表情を明るくさせ、慧士が信哉の声を頼りに視線をさまよわせる。己が笑顔の破壊力に気付かない、どこまでも無邪気な口調である。

教室内を占めるため息の量が、ぐっと増えたような気がした。

慧士は親しい間柄になればなるほど、子犬のような愛くるしい仕草をすることがある。今も耳があればぴんと立て、しっぱを忙しいな

く振っているに違いない。

おお可愛いと信哉は能天気にも観察しているが、大和は声にならないうめき声をあげたまま返事もしない。

教室をぐるりと見渡せば、やけに疲れ切った表情で、我先にと教室を後にするものが後を絶たなかった。慧士の方にちらちらと視線をやっではいるが、目が合うと奇声を上げ走り出すものもいた。精根果てた、疲労が蓄積されたまま哀愁漂う背中で部活に向かうものもいる。

大和は窓際の一番前の席だ。四方には彼の補助を務める生徒たちが固め、この教室で授業をする教師は、自然と窓際に寄りかかり、彼の傍で教鞭をとることが多い。

差別、えこ贔屓と口喧しく罵る人もいたが、一組はこの授業スタイルを生徒自ら提案したものだからと押し切り通した。受験間近の三年生の主張とは思えないが、一組は学校内選抜の慧士に魅入られた彼至上主義者の塊なので、何ら不思議もないとは、三年全クラスの総評である。

何せクラス替えの際教職に向かい「普段一緒に居るのだから、大和はクラスぐらい別にしてほしい」と脅しこむような集団だ。

その集団が、大和に向かって責めるような視線を向けている。その瞳が、この事態に対する大和の不手際を責めるものだ、悲しいかな大和は理解していた。殺気立った視線は、今ならきつと人をも殺せるはずだ。

揺らめく炎のように熱線は、大和にだけ注がれていた。慧士にはかすりもしない。

「高橋、あんた何してたの？」

休み時間になるたびに、今日一日大和が浴びせかけられた言葉だった。

「おい、筆頭。お前あれ何とかしろ。若だよ若。行き過ぎた美貌は毒つつーけど、あれ尋常じゃねえぞ。歩くだけでやばいって」

「高橋！ どうしてくれる、あの若君の状態。先生もろくに授業で

きない状態なんだぞ！」

「さすがにあれば———どうにか出来ないの、筆頭？」

「確かさ、恋に落ちたって言う話は聞いたけど、確かまだ片思いなのよね。若君。……片思いで、あれなのよね、高橋君」

「大和、お前は俺を犯罪者にしたいのか！」

「高橋！！」

恐るべし、四ノ宮慧士の美貌の威力。

休み時間ごとの駆け込み寺と化した大和の机は、大半が苦情か苦情と苦情にまみれたものだった。

曰く、四ノ宮慧士が麗しすぎて、手に負えない。

知ったことじゃないと机を投げつけなかっただけ大人の対応をしたと、大和は自分をとことん褒めてやりたかった。

席が近いために、必然的に話を聞く羽目になった信哉も同様である。

彼もその年代の少年に比べれば忍耐強い方だが、今日の場合はあまりに事情がかけ離れ過ぎていた。度を超している。これは大和の手に余る問題だ。

祝福し、穏便に、出来ればお相手の女性の影でもつかみたいなど、だから放課後聞きに行くかとばかりに軽く考えていた二人は、自分たちの認識の甘さにやり場のない怒りを蓄積させることとなった。

一組が厳戒態勢を敷くということは、若君に贈られる苦情一切が、筆頭に向けられるということになる。

のんびりと、これからどうするかと話こもつとする二人に、級友たちはその話こむ間すら与えてはくれなかった。

今日一日で心労が積み重なり、げっそりと頬がこけた二人は意を決し、無駄に笑みを振りまくと慧士に言いに来たのだが、犬のよくな愛らしさに、出だしから出鼻をくじかれてしまった。

「―慧」

ほんわかとした笑みを慧士は浮かべる。

その表情に、何度も何度も、今日一日どんな苦情が二人に寄せら

れていたか伝えたい言葉を飲み込み、大和と信哉は顔を見合わせた。輝かんばかりに喜びが滲み出る、恋に目覚めたばかりの少年に、恋のときめきを自重せよなどと注意するのも気が引ける。

今までの住民の重圧と敵意ある視線を考えれば、こうして年相応にはしゃぎまわる慧士というのは、微笑ましくもあるし、中学に上がるにつれ世を達観し、浮世離れた風情をまとい始めた彼を心配していた友人たちからすれば、万歳三唱で迎えたい事柄でもある。こつも弊害が発生しなければ、友人たちは今でも素直に祝福したいのだが。悲しいかな、現在の慧士を見るからに素直に頷ける訳がない。

頷けはしないのに、許されるなら友人として協力はしてやりたい。「なに、大和」

乗り掛かった船だとどんなに客観的に意見を述べようとも、他の四ノ宮家の面子と距離を置こうが、——大和は筆頭である。

家臣団の筆頭であると同時に、本人には自覚がない、四ノ宮慧士を甘やかす筆頭でもある。

「——帰るぞ」

ぐつと腹に力を込め、泣き笑いの表情を瞬き一つで心中に押し込んで、普段と同じく、大和は慧士の手を取った。

信哉が、呆れたとばかりに目を見張った。明日も今日の繰り返しだよ？ と肩をすくめた友人に、大和は首を振って仕方ないと答えた。

どうやら友人の恋を、大和は応援すると選択したらしい。

「信哉も一緒にな」

言外にこめられた意味を汲み取り、信哉は頷いた。

そのまま、慧士には見えていないと知りつつも、信哉は友人の深淵の瞳を覗きこんだ。

その瞳の奥で、煌めきに似た何かが輝いていることに気付き、そつと笑みを漏らす。上気した頬といい、全てが恋に彩られている。「はいよ、よろしく慧ちゃん。このメンバーで帰るのも久しぶりだ

ねえ。三か月以来？」

「うん」

「ありゃ、そんな経つてたかあ。どこぞの怖い筆頭が若君を独占してたから、こんなに時間経っちゃったのかねえ」

「……………信哉、何が言いたい？」

「べつつにー。あ、慧ちゃん、惚れた人ってどんな人よ？」

二人がやつの思いで絞り出した声音に気付くことは無く、この世の春を知った少年は、力強く笑みを浮かべた。

まるでこの世のすべてを受け入れ、愛し、讃える、聖女のように、菩薩のように、信頼する幼馴染と友人へとびっきりの笑顔を。

十字路で信哉と別れ、慧土を送り届ける。

四ノ宮家と高橋家は、城下町の旧武家屋敷の中にある。

旧武家屋敷の界隈に一戸建てを持つ人々は元は武士階級の人たちである。高橋家然り、四ノ宮家然り。

県の文化財に指定されるほどの、無駄がなく静謐に並び立つ屋敷は凜とした在りし日の空気を今に伝えている。

白塗りの塀が続き、思い出したように門が現れる。広大な庭と、立派な平屋造りの日本家屋の屋根が塀から見え隠れしている。

他県からの観光客からは「立派ですね」と褒め称えられることが多い屋敷並木だが、相続者たる子供たちからすれば、今後の維持費やら文化財故のその他もろもろの経費など、頭痛の種にしかならない自宅である。

増改築にも国の許可が必要なのだから面倒なことこの上ない。こうした『歴史建築』は、高度な発展を遂げた宇宙人たちからすると

『失われた歴史』に該当するようで、観光資源として最も最優先されるものだから、家人といえども好き勝手にできない。

御老人がいる家などは、報告せずにこっそり床暖房など導入していたりするが、それは暗黙の了解である。

四ノ宮家は広大な庭に造られた藤棚から『藤屋敷』と呼ばれ、高橋家は玄関先に植えられた枝垂れ桜から『桜屋敷』と呼ばれている。いつも通り、日常と変わらず四ノ宮家の玄関に慧士が消えるのを確認してから、大和はすぐ傍の自宅に向かった。

「おかえり、大和にい」

「おかえりなさい、大和にいさん」

珍しくそろって玄関で迎えた大和の弟たちは、片方はありありとした同情の視線を、片方は分かりやすい面白そうな視線を、長兄たる大和に向けた。

肩がけしていた鞆を下ろし、大和は胡乱げな瞳で弟たちを見た。

「——何だ、揃いも揃って。兄に小遣いの催促か、残念ながら義務教育期間中のしがない中学生が自由にできる金なぞたかが知れてるぞ」

「そうじゃないよ。大和にいに聞きたいことがあって。ねえ、慧士にいに好きな人が出来たって本当？」

「——あれ、慧士兄ちゃんの片思いなの？　うちじゃあもう恋人同士になってるって話題沸騰だったよ？」

「……頼むから沸騰させるな、そんな噂」

弟たちの額を続けざまに右手人差指で指弾し、大和はため息をついて居間へと向かった。

友人一同の願い空しく、どうやら慧士の恋煩いは守矢市中を駆け巡ってしまったらしい。

守矢市郊外の私立学校に通う二つ下の弟の学校でも話題になったということは、明日には老若男女あまねく知れ渡っているかもしれない。冗談でも詭弁でも何でもなく、それが事実だというのは、やはり新市街出身者の主張よろしく守矢市は「少しおかしい」のか

もしないと大和は思う。もしくはよほどの暇人の集まりだ。

さつさと歩く兄の後ろでは、第二人の討論会がにぎやかに続いている。

「そうなの。うちの学校じゃ、『守矢の若様』が、人並みに恋に落ちたって朝一で号外が配られて、更に昼休みのラジオ放送でも特集組んだ大騒ぎだったけど。中等部と初等部はもうみんな知っているんじゃないかな。明日あたりには高等部、幼稚舎にも知れ渡っているだろうし」

「うわ。さすが私立だねえ。ラジオ放送とかしてるんだ……」

「放送部が権限持っているから。賑やかなものだよ、人気もあるしね。尊のところではもう恋人同士になったって話だったの？」

「うん。だって、慧士兄ちゃんが振られるわけ無いじゃない。相手の人はもうめろめろだって皆言ってたよ？」

「おや、お熱いことだ。で、大和にい。事実はどうなの？」

「肯定も否定も出来ない」

健の細い柳眉がつりあがった。

声を荒げることも感情を表すことも極端に少ない上の弟は、兄の発言の真意をはかろうとしているのか、一瞥をくれたまま無言を貫いている。

代わりに、下の弟は忙しく兄二人を交互に眺め、心配そうに成り行きを見守っていた。

「大変なことになるでしょ？ どうするの、大和にい」

「——詳しいこと話す。ちよつとこつちこい」

第二人は顔を見合わせ、兄の言葉に従い居間に向かった。

四ノ宮家の兄妹とは違った意味で、高橋家の三兄弟も守矢市では有名人である。

まず、高橋大和。

高橋家の長兄であり、また四ノ宮家筆頭といえ、この人をさす。中学生にしては大柄な体躯、短髪黒髪。端正な顔立ちではないが、スツキリとした鼻梁と、父親譲りの切れ長の一重、薄い唇が、

涼やかな歌舞伎俳優のような面立ちを連想させる。

そつけない口調が多く、心優しいのだが誤解を受けやすい少年で、守矢市に暮らしている高橋一族の中では一番四ノ宮家に近く、繋がりも強固である。故に、高橋家と聞けばこの大和を連想する学生も多い。

その大和の一つ下の弟が、健。

大和たちとは違い、守矢市郊外に建てられている、私立桜桃学園中等部に通っている。

肩先まで伸びた黒髪を一つにくくり、伸びた前髪が目にかかっている。兄同様涼やかな風貌で、ひよろりと伸びた体躯と相まって、江戸時代の武家の女性のような独特の雰囲気がある。歌舞伎で言うのなら女形。基本は無表情無感情、飄々とした受け答えが多く、茶化したように兄をからかうことだけを喜びにしているため、大和との関係にいざこざが絶えない。

その二人を兄に持つ、高橋家末子、尊。

兄二人に「大器晩成型」と太鼓判を押されている末弟は、四ノ宮家の双子と同年である。

癖の無い黒髪、母親譲りの兄二人とは違う大きめな瞳。特にこれと言って特徴の無い顔立ちなのだが、武将よりも知将のタイプで、人好かれやすい愛嬌があり、物静かな性格も相まって、地味な立ち位置ながら学行事などの物事を中心人物になる機会が多い。

三者三様に育った兄弟たちは、生まれの複雑さ所以か、同世代の兄弟たちよりも仲がいい。長兄次兄間に勃発する喧嘩にさえ目を瞑れば、よその家庭が驚くような信頼関係と親密さがある。

「喜ばしいことに、慧士が好意を持っている女性が居ることは確かだ」

居間に入ると、普段ならテレビの前に陣取って、再放送のドラマに齧りついている母親の姿は見えず、家の中はしんとしている。

いぶかしむ大和に、尊が「母さんは向かいの浅野さんにおかずのおすそ分けに行ったよ」と答えた。場の空気を読み、それとなく答

えや物事の方向性を示すことに、この末弟は優れている。

「母さんが帰ってきてから、話、続ける？」

「いや、いない方がいい」

高橋家には、残念ながら洋室はなく、完全に畳が敷かれた和室のみで家が形成されている。これは亡くなった祖母の意向で、「日本人なら畳のほうが落ち着くんだもの」の一言により、平屋で畳張りという古風ないでたちが今なお守られている。——あえて国からの指示故には言わない。

「おめでたい。赤飯でも炊く？」

「……健にいさん」

「分かつてる、大人しく聞くよ——で、それで？」

上座に座った長兄に倣い、第二人も下手に正座で座る。兄が真剣に話そうとしている時に、足を崩しておざなりに聞くとすることは高橋家ではありえない。砕けた雰囲気はそこに無く、張りつめた糸のような緊張感がある。

ややあつて、長兄はため息とともに切り出した。

「噂はもう明日には市内中に広がっているだろうな。健も尊も、明日は質問攻めになるかもしれん、そこら辺は各々判断して、けむに巻くか騒ぎを治めるか、それとも消火活動に勤しむか、決めてくれ」
「慧士にいい好きな人がいるってこと自体は真実と取っていいんだね」

「事实は伝えている」

「どこまでが嘘？」

言葉は殊勝だが態度は尊大である。

瞳を眇めた長兄と飄々とする次兄に割り込むようにして、末弟が声を張り上げる。

「ねえ大和にいさん、それって慧士にいさんには好きな人がいるけど、まだ付き合っていないってこと？」

「そうだ」

「……………あの慧士にいが片思い？ 相手誰？」

健が眉根を寄せ、否定的な色合いを問いににじませた。

無理もない。高橋家の三兄弟は、四ノ宮慧士が一番近くで、彼の持つ美貌が人々をいかに惑わせてきた、そのすべてをこの目で見てきたのだ。

慧士が憎いと罵った人物が、慧士を目にしてその美貌にひれ伏したことも、妻子もいる男性が、慧士への道ならぬ恋に落ちる前にと、自殺さえ図ったことがあったのだ。

その慧士が片思い。両想いでもない、片思い。

天変地異か、ダーウィンの進化論が否定でもされたのか。それほどあり得ないことだ。

「落ち着け、健」

「落ち着いてられる？　これで今後半年はこのネタで学校の奴らの格好の的にされることが決定したんだよ、俺たち。円満解決になるならまだしも、これでこじれでもしたらどうするのさ。守矢市のじじばば総出で戦犯探しに躍起になるにきまつてる。それに、みこが双子の八つ当たり対象にされたらどうするの、大和にい」

「……俺は大丈夫だよ、健にいさん」

末弟は軽く首を振ると、長兄の目をしっかりと見つめた。

「俺は平気。あの二人にとって、慧士にいさんは自分の命よりも大切な、すごく大切な人なんだ。だから、その人が自分たちよりも、大好きで、一番になる人が出来たことに、まだ戸惑ってるだけだよ。八つ当たりで百花と採花の支えや発散になれるなら、俺は喜んで二人の傍にいる。だから俺は大丈夫」

ぱちりと瞬く大きな黒瞳も、ふくらみが残った頬も、まだ子供特有のものだというのに、大人びた口調で尊は笑みさえ浮かべて言うてのけた。

「俺が心配なのは、慧士にいさんだよ。片思いって言ったね。でもどこで出会ったの。たいていは大和にいさんや、百花や彩花や、もしくは学校の皆と一緒にいる慧士にいさんが、どこで女性と出会う時間とタイミングがあったか、俺にはさっぱり分からない。大和に

いさん、もしかして、その人って……」

「ああ」

大和は気遣わしげな末弟の黒髪をわしゃわしゃとかき混ぜて、今日何度目か分からないため息を吐いた。

「どこのだれかは知らん。慧士の――、一目惚れだそうだ」

数分前、慧士と帰宅したその道すがら。

「一目ぼれとは恐れ入ったね、ねえ大和」

「…………… 本当にな……………」

信哉のお手上げですという声に、大和も同意した。

恋を知り、この世のすべての幸福を手にした神のような絶対的な美貌を振りまきながら慧士が吐露したのは――旧市街地区にある公園で、とある女性と出会ったということだった。

慧士は気配に聡い。

目が見えぬ代りに、他の器官がずば抜けて優れている。一度声を聞けばその人を忘れないし、歩き方も、仕草も、衣擦れ一つの音で理解してしまう。

記憶力もいい。

昨年起こった中学校の生徒間で起こった『抗争』があつてからは、その才能にさらに磨きをかけたようで、市内の学生であれば全員の名前と家族構成を覚えるようにしている。

「なにかあつたときにすぐに対応できるようにしたいから。誰それさんと誰それさんがお知り合い、とか親戚同士とかはじめから分かつていれば、対応策を講じる時間が変わってくるでしょう？ 個人情報保護法に引っかかるって怒られたら仕方ないけれど…… やっぱりまずいかな？」

その昔流行った漫画の中で、女性を愛し、女性を尊び、最強のフェミニストの主人公が、通う学園内の女生徒全てのプロフィールを把握していたと言うが、慧士も同じようなものである。

何事も極めてしまうと、怒りよりも呆れが先立ってしまう。女生徒だけでなく、全ての生徒を網羅している分、慧士の方が若干たちが悪い。

その慧士が、『馴染みのない、見知らぬ人』と出会った。まひる公園の滑り台の前の長椅子でのことだ。

「……慧ちゃんさ、それ何時頃の話？」

「うーんと……家を出るときに百花が毎日見ているバラエティ番組見ていたから、八時くらいかな？」

大和がなにか言いたそうに逡巡し、そのまま押し黙った。顔にはありありと「何故その時間帯にお前が一人で外出している」と書かれている。筆頭は無意識の過保護だ。

あえて拾うこともないだろうと無言の主張を繰り返す大和をすっぱりと切り捨て、信哉は聞いた。

「コンビニとか？ それにしても距離が遠いよね。スーパーともコンビニとも真逆の位置だ。そんなに必要なものでもあったの？」

「明日学校で使う調理実習の牛乳。まるまる一本父さんが飲んじやつたみたいで」

「……俺か双子と一緒に行けばよかっただろ」

「それこそどうして？ 自分が必要なものを、どうして他の人に押し付けることができるの？」

「それもそうだが……」

「夜に慧ちゃんが一人で出歩くのはちょっと危ないかもねって言うてるの、大和は。申し訳ないけど、それは俺も同感。いくら慧ちゃんが色んな事に聡いって言っても、世の中物騒なんだから。全部を背負う必要はないでしょ。もうちょっとこっちに寄りかかって欲しいかなー、なんて。おけ？」

「……うん」

慧士が遠慮がちに頷く。どうしてそこで一線を引くかなと信哉が笑った。

「でもさ、それ答えになってないよね」

瞬時に表情を切り替えて、信哉が問いただした。

牛乳が欲しかったというわりには、向かった先はスーパーがある
ショッピングモールとは真逆の住宅街にある公園だ。それも夕方にな
ると住宅街故に人氣が少なくなる、車の通りも少ない場所だ。

「どうして公園？ 散歩でもしようって気でも変わった？」

「呼ばれたから」

友人二人が顔を見合わせる。端的な物言いは時間省略に有効な手
段だが、前後を省略されすぎると意味不明になる。

誰に、何のために、呼ばれたのか。そこを説明しろと言っている
のに、見事にすっぱ抜けた。

「……ごめん、違う。呼ばれたんじゃない。呼んだから、迎えに行
ったというか……えーと、何て言えばいいのかな。呼びだされた？
頼まれた？ ああ、もどかしいかも、この感覚。外から新しいひ
とが来たから、迎えに行つてっていきなり頼まれたというか、でも
向かったのは僕の意志だから……」

「意味が分からん」

「ごめん、俺にも解読不能」

「——だから説明しづらいんだって！」

とうとう叫んだ慧士を宥め、大和が考え込んだ。はたから見れば
意味不明な単語の羅列を繰り返す慧士だが、大和も信哉も馬鹿にし
たところはない。ただたんに『意味が分からないので』戸惑ってい
る。

「それってさ、慧ちゃんが『四ノ宮』であることに関連してる？」

「——オカルトじみてるって呆れる？ 信哉は」

「いや。慧ちゃんのそういう勘は事実って分かってるから呆れはし
ない。感心はするけどね。お狐様馬鹿にできないし」

「お前がそういった勘に優れていることは守矢市に住んでいるなら
だいたい奴なら知ってるだろ」

「——そうだけど」

銀狐に由来する人並外れた美貌。妖怪たちを臣下に加えていたと

いう四ノ宮家。

不思議なことは、慧士の周囲に常に漂っていた。空気のように、当然のごとく存在していた。

ひとではない影が、飛びまわる。

守矢市では妖怪やお化けと呼ばれる類のものに触れて子供たちは育つ。その中心は慧士。台風の目のように、彼に近しいものたちは科学では証明できないような『なにか』に触れていく。

恐怖よりも好奇心が勝る子供たちは、率先して彼らと親しんでいるので、いまのところ害はない。

新市街があれやこれやと口を出すこともあったが、宇宙人が一番地球上で言う『妖怪』や『お化け』に近い外見をしていると知った今となっては、なにがなにやら分からない混沌とした状況に陥った。

宇宙人は四ノ宮家と親交が深い。中心人物に四ノ宮家の次期当主がいたとしても、状況的にはなんらおかしくはないのだ。

お忍びで四ノ宮家を訪れた宇宙人が、人間の子供と交流をもっている可能性もあるため、表立って糾弾も取り締まりもできない。宇宙条約の威力は絶大だ。ポルターガイストも調査出来やしない。万が一透明に変色できる宇宙人のいたずらだったら洒落にならない。

所詮は辺境特別指定惑星『地球』。与えられた権限は愛玩動物の如く少ない。

四ノ宮には非難を向けられても、宇宙人にはあれやこれやと注文を付けることはできない。あつという間に地球規模の問題になってしまうかもしれない。

大人たちの思惑なんのその。

本当に『お化け』なんだか、『宇宙人』なんだか、よく分からないうちに幼少期を終える子供たちは、そのうち接していたことも忘れていく。

成長期を終えれば、遠い夏の日の思い出の如く、陽炎の向こう側でたゆたう記憶に疑問を覚えることもなくなるだろう。厄介なのが

体験していない癖に記憶を消さない大人たちの方だ。

信哉も越してきたばかりの頃、慧士と行動を共にしていた途中、ふきを握った鯨を見た。

二足歩行の巨大な鯨だった。

粹に藍色の着物を着た鯨は、信哉に気付くとちよつと驚いたような表情をして、その場をそそくさと去った。あまりに自然に溶け込んでいたので、声を出すことも忘れてしまった。

それだけではない。語れば多数出現するおかしな『記憶』は、年追うごとに忘却の彼方に消えてしまっている。

押しとどめようとは思わなかった。忘れたいと深層で願うのなら、それに従うのが流れというものだ。

新市街者は喜んで糾弾する慧士の一種『才能』とも呼べる的中率が百パーセントを誇る『勘』を、疑うものは同級生には居ない。

「まあ、その慧ちゃんと呼ばれたって言うのなら、向かうのも仕方ないかもしれないけど……行った先にその女の人がいたの？」

「うん」

「で、お話したと」

うれしそうに慧士が微笑んだ。

「素敵な女性だったんだ」

「……………まぶしい。慧ちゃん、まぶしい。俺直視できない！」

「信哉。遊ぶな」

「いや、茶化さないとやってけないでしょ、これ」

一目ぼれとは。しかも言葉を交わしたのはものの数分だと慧士は語った。

女性は逃げるようにして、慧士の傍を離れてしまった。手がかり一つ残すことなく。

慧士の知らない人だといのなら、その人は守矢市の部外者の可能性が高い。慧士の恋を応援しようにも、探しようがないではないか。……………なにそれ、現代版シンデレラ？」

「手がかり残さず、慧士の目も見えていない時点で難易度が跳ね上

がっているぞ」

ガラスの靴がないのでは、なにから辿っていけばいいのやら見当もつかない。

「……手がかりなら、あるよ」

慧士の言葉を聞き間違えたかと、友人二人は顔を見合わせた。同時に叫ぶ。

「何だつて？」

「どういうこと？」

「だから、たぶん、その『シンデレラの靴』に相当する落としもの何故それを先に言わない。

「——今は？」

「持つてるよ。失くすと困るから。それにもしも偶然会ったら、すぐにお返しできるようにって」

「ちょ、慧ちゃん見せて」

大和と信哉の矢継ぎ早の質問に、苦笑しながら慧士が受け答える。握っていた白い杖を信哉に預け、通学鞆から取り出したものを二人に差し出した。

光を孕んだ、銀色のそれは——。

——そうして、一晩だけという約束で、慧士から預かってきた『シンデレラの靴』は、今大和の手の中にある。

「……………」

「……………」

無言。弟達の冷たい辛辣な視線に、大和はあらぬ方向へ顔を向けた。

「あのさ、大和にい」

「言いたいことは分かる」

「だったらこっち向いてくれないかな。人と話すときはちゃんと視線合わせてよね。でさ、大和にい」

『それ』を睨みながら、健は深いため息をついた。

「——慧士には、変質者にでも惚れたわけ？」

銀色の刃をもったそれは、農作業用に従事するものならば一度は目にしたことはある。

まぎれもない、鎌だった。

四

「鎌もった相手が逃げ出したことは喜ばしいのか、それともその鎌持った相手に惚れた慧ちゃんがおめでたいのか。もうなにこれ、意味分かんない。どうしろっての、俺達に！」

「そういえば、よく怪我もせずに拾えたな」

「ああ、うん、そうだね。慧ちゃん器用さ発揮しすぎ。いや、悪いってわけじゃないけど、なーいーけーどー！もつと違うところに注目しようよ！ おかしいでしょ、市中で鎌！ しかも公園で！ 物的証拠があっても全然解決に繋がりもしないじゃん！」

「そうだな。指紋でも取っておくか？」

「俺達どこの諜報機関？ それとも化学捜査班？ 犯罪心理学？ 特捜部のエリート？」

「FBIとかの特別班か？ 中二病も大概にしろ」

「どれも外の宇宙の科学技術に押されちゃったけどねえ。それと中二病を貫いた人が初の対宇宙外務官にまで上り詰めたサクセスストーリーはいつ見ても笑っていいんだか褒めていいんだか悩むけど――

――じゃなくて！」

「いい加減静かにしろ。人が少なくともここは図書室だ」

昼休み。厳戒体制のまま慧士を教室に閉じ込めた一組の判断は正しかった。

列なして慧士の様子を見ようと押し掛ける後輩同級生どもを一喝し払いのける敏腕委員長先導のもと、一組は一致団結していた。

慧士の破壊力にもつとも被害を被っているのは一組なのだが、物見遊山で動物園のパンダよろしく慧士を見に来る生徒たちの存在は許しがたいらしい。

祝福はともかく好奇心ならばお断りだ！ と、山のようにやって

くる生徒たちを、ちぎっては投げ、ちぎっては投げ——ともかく、一組が慧士を保護している限り、恋におぼれたかの若君を傷つける者は近くことは不可能であろう。

慧士の学校生活に関しては丸投げを決め込んだ大和と信哉は、並んで図書室の貸出口に座っている。

図書委員会に所属している大和に、信哉がひつついてきた形だ。

市立守矢第二中学校の図書室は広い。寄付を行う卒業生も多く、さらにもとあった蔵書も多いのだから、室内が広いのは当然だが、それにして一中学校というよりは、市立図書館のような様相をしている。

のわりに、本より遊びが先行する御年頃。利用者は少なく、今も室内には数えるほどの生徒しかいない。

日差しすららか、昼休みの昼寝スポットには最適な学習スペースもあると言つのに、生徒たちには知られていない。

大和も信哉も、会話はとりあえず小声である。

徐々にヒートアップしていった信哉を窺め、大和は読んでいた本を閉じた。

「健も呆れていたな。尊はなにかフォローしようとして失敗していたが」

「そりゃあ呆れもするって。シンデレラの靴がまさかの山姥の武器に変貌だよ？ 慧ちゃん、桃でも投げつけて追っ払ったわけ？」

「どうだろうな」

人に物を投げつけるという発想もなさそうだ、あの若君は。

「なにお前らお通夜みたいな雰囲気醸し出してんだよ」

大人しく二人の会話を聞いていた第三者が、そこに参入してきた。信哉が顔を上げ、その声の持ち主に「だってねえ」と答える。

「鎌持ってる女性って、どんな人だと思う？」

「なんだそれ。造園の業者か公園の雑草除去のボランティアってことか？」

「うつん、普通の日常で持ってる人」

「それはただの変質者だろ」

「でーすーよーねー……」

こここのところめつきり物騒になったからなあと呑気に第三者は呟いている。まさかその『鎌をもった持ち主』が慧士の思い人とは考えもしていないだろう。

「立花は慧ちゃんのこと見た？」

「恐いから見ていない」

潔い判断である。

立花と呼ばれた少年は、髪は金色で、校則で禁止されているピアスを耳にしていた。ほりが深い顔立ちで、日本人離れたその外見から少年の両親のどちらかが外国人であることを物語っている。

はたから見れば確実に不良であるが、この少年は入学以来学年で十本の指に入る好成績を収めている優等生である。色あせて鈍い赤い光を放つピアスは、亡くなった母親の形見であることを同級生たちは皆知っている。

「高橋も杉山もどうにかする気、ないのか？ 一組の連中が軒並み頭抱えて困っていたぞ」

「一組だけじゃなくて俺らも困ってんの！ 見てよこの現状を！」

立花は信哉を頭からつま先までまじまじと眺め、

「御愁傷様」

「一言！ 俺達の苦勞を一言！ 少しぐらいは手伝おうとする態度も出したら？」

信哉を軽くいなして、立花は抱えていた本を二冊大和に差し出した。

「貸出よろしく」

「——貸すのはいいが、借りてる本も早く返せ。お前ため込む癖があるだろう。予約が悶えているんだから気をつけろよ」

立花は延滞常連者に名を連ねている。督促状をプリントし、持っていくのも図書委員の仕事だ。全学年の延滞者の生徒名を覚えていくわけではないが、さすがに二度三度と続くと嫌でも名前を覚えて

いく。図書館を利用することは喜ばしいが、ルールは守って欲しい。カウンター席の椅子の背後に設置されているパソコンを操作する大和に向かつて、立花は肩をすくめた。

「ああ。ごめん。明日持つてくる」

「そう言つて何度持つてこなかったことが……。もう督促状を持つていくのは御免だからな」

「分かった分かった」

「返事は一回」

「はい、分かった」

「二回になつてゐるだろ……」

何度も念を押す大和に、立花は笑みをこぼした。うんと頷く幼い仕草がやけに似合う少年だ。

「それと、若君の恋愛成就するように祈つておく。あいつのことは嫌いじゃないし、幸せになるなら出来るだけ歓迎したい。それって普通のことだろ？」

言葉には含みがなく、心からそう祈つてゐることが分かる。立花は学校内では新市街よりの新興住宅地のアパートに住んでいるが、中立の立場を崩さない。こうして大和や信哉と話するときも穏やかに接することが多く、慧士に対する好意も素直に口にする。

「人の幸せ願うのが駄目だつていうのがおかしい。それとなくなら協力できるから、困つたことあつたら何か言え。どうも今のお前らを見ていると手に余つてゐる気もする」

言いながら立花は右手でピアスに触れた。

「これの借り、若君にはまだ返してないからな」

「……ありがと。いい奴だね、立花つて。そのまま出来るなら若君に尽くして尽くしまくつて俺達の代わりになつて！」

「あ、それはパス」

「即答？　そこ即答なの？」

「面倒事は関わらないようにしたい。お前らと本格的にからみだすと幾つ命があつても足りない気がする」

「またまたー。三竦みの抗争のときは先陣切って第一中学に乗りこんでつたじゃない」

「あれはあれ、これはこれ」

「えええええ、お願いしますよ立花様ー」

話こむ二人に半眼で大和は問いただした。

「——お前ら、図書委員の前で話こむとはいいい度胸だな。あそこに貼つてある標語読めるか？」

「——えええと、『図書室ではお静かに』？」

「従え。話したければよそへ行け」

「なあ、杉山」

「なに？」

貸出操作を終えた大和から本を受け取り抱えなおした立花は、少し考えてから言った。

「さっきの質問の続き。——鎌持つてる女つて、ずっと昔にそんな特徴持った変質者が噂にならなかつたか？」

立花の言葉に、信哉が記憶を辿るように両目を眇める。

「いたっけ、そんな変質者」

守矢市には悲しいかな変な人間が集まってくる傾向がある。旧市街と新市街の対立を見ているだけでも分かる気がするが、良きに悪きに大変な騒動が起こりやすい土地だ。

なにも変な『人間』だけが守矢市を徘徊しているわけではないが——『それ以外』の方が遭遇する倍率としてはよっぽど高いのだが、とにもかくにも、一般の地方都市にしてみればそういった存在が多く目につく。そのほとんどの狙いが四ノ宮家の次期当主とその妹だと言うのだから、大和たち友人一同の心労と気苦労は押して測るべしといったところだろう。

信哉も四ノ宮慧士と高橋大和の友人を続けているうちに、自然とそういう『情報』には過敏に反応するようになった。加害者被害者両者に配慮し、また模倣犯を生みださないため情報統制が強化されて幾年かたつが、規制は年々強化されている。

凶悪犯や悪質性の高い変質者などは徹底的に情報が監視され、政府の支配下にあるので、報道は滅多にされない。宇宙からもたらされた技術により検挙率が飛躍的に向上し、またそれに伴い凶悪犯罪も減少の一途を辿った要因も強いが、迅速な警察の対応にメディアが報道する隙を与えてもらえないことが大きいだろう。

ただし、宇宙人来航以前の通り魔的凶悪犯罪の検挙率は、伸び悩んだままである。

また、『誘拐』や『拉致』とは明らかに異質であるとされるもの――『現代の神隠し』と呼ばれる、平成時代の幼児の失踪事件に関しても、一つも解決できていない。後者の事件は誘拐時の異質な状態故に、「もしかしたら犯人は宇宙人ではないか」という噂が横行し、「宇宙人の犯行故に警察も手が出せず」解決できていないのだと指摘する知識人もいるが、証拠がない以上机上の空論の域を出ない。

「……んーと、素っ裸になったり可愛い子追いかけまわしたり精神的にダメージ大の奴らは多々聞いたけど、凶器持って肉体的に傷つけようとした奴らって守矢市にいたっけ？ 連絡網で回ってきた覚えもなければ、市から特別警戒発令出されたこともなかった気がするけど」

性的なことを主張する変質者は多々存在したが、直接暴力に訴えかけてくる変質者は聞いたことがない。

「そうじゃない。守矢市じゃなくて、全国的なものでだ。……ああ、そうだ。高橋、そのパソコン、ネット繋げるか？ 鎌、女で検索してみてくれ」

「ネットは生徒が自由に使えないようにブロックがかかってるぞ」

「え、図書委員長でも出来ないのか？」

あまりに立花が不思議そうに聞くので、大和も強く反対することが出来ずに、言われるままパスワードを入力した。

変に天然が入っている立花に、委員長の立場だとか、職権乱用だとか説明しても理解しないだろう。後輩にはれないようあとで履歴を消しておこうと大和は胸に刻みつけた。

「それって、女性、鎌、で出てくるの？」

「ああ。うん——いや。悪い、変更。通り魔にしてくれ」

「……通り魔ねえ」

普通に考えれば、確かに一般人が鎌をもって出歩くはずがない。常日頃持ち歩いていたら大騒ぎどころの話ではないだろう。銃刀法違反もいいところだ。

ただ大和や信哉が、通り魔や変質者や妄執者といった人種に目を向けていなかったのにも理由がある。

あの慧士が惚れた相手が、まさかそんな、といった感情がさきだったのである。

友人の欲目だと分かってはいるが、慧士に限って変質者に惚れるとは思いたくなかった。それも個人の性癖に関係する露出狂といったものではなく、——鎌をもった危険人物が相手だとは、想像するのも苦痛を有する作業である。問答無用で慧士をいかに諦めさせるかに心血を注がねばならない。

慧士曰く『素敵な女性』が通り魔などと——洒落にならない事態である。

検索サイトに繋がり、そこに女、鎌、通り魔と大和が入力する。あまりパソコンを自由に使用していることがばれても困るので、信哉と立花が身を乗り出して大和の左右を固めた。

エンターキーを押すと、何千ものページが表示される。どのページにも共通しているのは、平成に起こった、女性の通り魔事件の内容に触れていることだった。

どこのページもほとんどがアングラ系のサイトで、特殊な殺人事件や、報道規制がされた事件の詳細を集めて記録している。うわあと眉宇を顰めた信哉に、立花が意外そうな目で見る。

「杉山ならこういう事件について詳しいと思ってた」

「あのね、人が特殊な指向の持ち主みたいな言い方辞めてくれる？　こういうの喜んで見て回る趣味は俺にはないよ。胸糞悪くなるどころか心臓が冷えて痛くなってくるんだから」

「そうなのか？」

「そうなの」

「——立花が言ってた事件ってこれか？」

一人検索を続けていた大和が、該当事件と思わしきページを開く。
「ええと、なになに。黒いコートを着た女性が、……鎌を片手に小
学生を襲ってたあ？ 被害者の数二桁って、子供狙ってる時点で後
味悪っ。なにこの事件」

「——全国規模で報告あり。北海道で二年生が服を切り裂かれ
た次の日に、鹿児島県で五年生が襲われている。——模倣犯も大量
に居たんだろう。規制がかかったのは五件目からだな。報道もされ
てないし——お前、これどこで知った？」

「……………知らない」

「うわー、投げやりな回答」

規制が強化されるに伴って、強化後に生まれた子供たちにとって
凶悪犯罪は遠い世界の話になった。時折父母たちが口にする事件に
対して、子供たちは疑わしい眼差しを向けるときさえある。実例を
目にすることもなければ、メディアから聞かされるわけでもない、
自分の意志でサイトを検索しない限り出会うことのない凶悪犯罪の
数々を、まるで鏡の向こう側のお話にしか思えないのだろう。赤ん
坊の頃から自分たちに所持が義務付けられている携帯電話や電子カ
ードの意味も分かっていないはずだ。

立花は犯罪やごたごたを避ける傾向がある。好き好んで事件を調
べようとはしないだろうし、うわさ話に飛び付くタイプでもない。

「目撃例が押し並べて、黒のコートに、長い髪、んでもって被害者
は凶器は鎌だったと証言。女性であったと証言するものもいれば、
男性だったと否定する被害者も続出。結果被疑者不明。いや、なん
でこんな不審者捕まえられなかったのか、そっちの方が不思議なん
だけど……………なにこれ、七不思議？ 死亡者が出なかったことがまだ
救いな事件じゃん」

「……………立花」

どうだ、と確認するように大和が聞けば、立花は難しい表情のまま首を振った。

「違う、これじゃない」

「これ以外の事件は――」

「ごめん。調べてもらって悪いが、事件じゃなくて、違う感じの奴だ」

またざっくりとした質問である。なにがどう違うのか説明してもらわなければ、いかに文明の利器といえども活用することは困難だ。『的を射ない発言は慧士でこりこりなんだが……』

「事件……事件だけど、こう、ちよつと違つていうか……なんて言うか――ああ、怪談っぽい感じだ」

「この通り魔事件もだいぶ怪談めいてるけどねえ」
「そうじゃない」

立花が液晶を指さす。ページを何回かスクロールし、文章を読みこんでいく。一点にぴたりと当てたまま、これ、と呟いた。

「おかしいだろ、この事件」

「なにが？」

「三件目までは同一犯の犯行の可能性が高いつて書いてある。発生地点に近かったことと、犯行手口から――でも報道されて十日後の四件目と十二日後に発生した五件目は、犯行時刻の違いや凶器の違いから第三者の疑いが浮上、ここら辺からメディアが取り上げ始めて、それから全国でなし崩しに発生。三件目以降はほぼ模倣犯で間違いないんだろっけど……」

「それがなにか気になる？」

ぽつりと大和が呟いた。

「……全国報道された四件目から、前三件とは全く関係のない犯人の共通点が生まっている」

「それだ、違和感。模倣犯なのに、模倣していない」

「模倣してない？」

大和に同意するように立花が何度も頷いた。確認のため信哉も事

件概要に目を通すが、確かに二人が指摘したとおり、四件目から事件ががりとかわってしまっている。

「——あ、本当だ。黒いトレンチコート、妙齡の女性っていう共通点以外、犯行方法も対象者も変わってる。代わりに、顔を覆う大きなマスクが追加されて、武器がハサミから鎌にチェンジして、被害者の対象年齢も低学年に限定されてるし、殺傷性が増してるね……でも、四件目以降はこの共通点が徹底してるよ」

「なにか別の物を模倣したとかか？」

「なにそれ」

「俺が知ってるのは、たぶん、そっちの方だと思う」

二人の視線が立花に集中した。

「その事件のきっかけになった三件じゃなくて、模倣された方の事件だ。事件って言うよりも、もつと……怪談めいた話だった、たしか女性で、鎌って、そんなものが登場していた気がする。詳しくはまだ思いつけないけど……なんだったか……確か、なんとか女って名前と呼ばれていた気が……」

「なんとか女？ なにそれ、本格的な怪談もの？ 江戸時代とかに濡れ女とか居たよね。その傾向なわけ」

投げやりな信哉の問いにも、律儀に立花は首を振って答える。

「信哉、聞き覚えは？」

「ない……はず。ぴんと来ないから、たぶん聞いたこともないよ」
妖怪や都市伝説、奇説異説といったジャンルのものは、ここ数十年の間で縮小傾向にある。『あなたの知らない世界』よりも、遠方よりやってきた『宇宙人』の方がよっぽどセンセーショナルであり、バラエティに富んでいたためだ。

「大和は？」

「右に同じ」

「だよ。——でもこれだけ模倣犯が現れるぐらい、当時のひとたちにとっては有名な話だったってことでしょ？」

「この事件があつてから、あまり話題にのぼらなくなった、と考え

「た方が自然だろう」

「……あー、まあ。連続切り裂き魔の元ネタの話なんて、不謹慎すぎて話題にも出来ないよね……。全国規模の話だし。ああ、そだ。大和、家に帰ったら聞いてみれば？ そうついた『お話』に詳しい適任者一人居るじゃん」

信哉の言葉に、大和が渋面を作った。立花が小首を傾げて二人を交互に見つめると、けらけらと信哉が笑う。

「大和の下の弟さんはね、ストーリーテラー目指してるんですか？ って聞きたくなるぐらい、色んな話知ってるのよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4146p/>

銀狐の森

2011年1月27日11時10分発行